

時間環境構成方略の向上が定期試験に与える影響

有光 一樹¹⁾, 笹村 聡¹⁾, 西野 愛¹⁾, 川上 佳久¹⁾, 篠田 かおり¹⁾, 大塚 貴英¹⁾,
平松 真奈美¹⁾, 石元 美知子¹⁾

平成24年度 高知リハビリテーション学院紀要 (平成25年3月) 第14巻 別刷

1) 高知リハビリテーション学院 作業療法学科

報告

時間環境構成方略の向上が定期試験に与える影響

有光 一樹¹⁾, 笹村 聡¹⁾, 西野 愛¹⁾, 川上 佳久¹⁾, 篠田かおり¹⁾, 大塚 貴英¹⁾,
平松真奈美¹⁾, 石元美知子¹⁾

The influence that improvement of time environment constitution
stratagem gives a regular examination

Kazuki Arimitsu¹⁾, Satoshi Sasamura¹⁾, Ai Nishino¹⁾, Yoshihisa Kawakami¹⁾, Kaori Shinoda¹⁾, Takahide Otsuka¹⁾,
Manami Hiramatsu¹⁾, Michiko Ishimoto¹⁾

要 旨

本研究では、作業療法士養成課程にある学生に対して、スケジュール作成による時間環境構成方略獲得についてアプローチし、定期試験成績に与える影響について検討した。

対象は、平成X年度の1年次生40名（対照群）と次年度の1年次生39名（介入群）であり、定期試験成績を後方視的に調査した。介入では、定期試験の1ヶ月前に、学習方略の説明と時間環境構成方略の獲得が定期試験対策になることをオリエンテーションし、その対策としてスケジュール作成を実施させた。

その結果、介入群の時間環境構成方略は有意に向上し、定期試験5科目中、4科目において有意な成績の向上を認めた。また、施行後のフィードバックにおいても、肯定的な意見が多かった。

スケジュールの作成は、時間環境構成方略を改善させ、定期試験成績向上の一助になったと考えられた。
キーワード：スケジュール作成、時間環境構成方略、定期試験

【はじめに】

近年、大学への進学が容易となり専門学校へ進学する学生数は減少傾向にある。専門学校へ入学する学生のほとんどは、学力試験によって選抜されておらず、少なくとも高校進学後は受験勉強を経験していない。その為か、学生の学習では、教科書やノートを持ってこない、授業時間を把握していない、授業と関係ない携帯電話や教科書が机上に存在する、学習に集中できないなど、学習時間の使い方や学習環境に多くの課題を認める。

学習方法への指導として伊藤ら¹⁾は、「学習動機づけの高い学生は学習方略を使用する傾向がある」

と報告した。学習方略とは、「学習効果を高めることを目的とし意図的に行う心的操作あるいは活動」である²⁾。これまで我々も³⁾、学生の学習方略について調査した。その結果、学習方略の中でも特に時間環境構成方略の低下が著しい者ほど定期試験が不良となることを見出した。そして、少人数ではあるが、時間環境構成方略が向上すれば定期試験成績の向上に繋がることを報告した。

今回、時間環境構成方略を獲得させるため、定期試験対策のスケジュール作成を実施し、それが定期試験成績に与える影響について検討した。

1) 高知リハビリテーション学院 作業療法学科
Department of Occupational Therapy, Kochi Rehabilitation Institute

【対象】

高知リハビリテーション学院作業療法学科に平成X年度に入学した1年次生40名（男性23名，女性17名，平均年齢18.1±0.3歳）と次年度の1年次生39名（男性22名，女性17名，平均年齢18.5±2.2歳）を対象とした。スケジュール作成を実施した次年度の入学生を介入群とし，スケジュール作成を実施しなかった平成X年度入学生を対照群とした。

【方法】

介入群，対照群の両群共に入学時に時間環境構成方略に関する8項目を用いて学習方略に関するアンケート調査を行った（表1）。この調査は7段階で評価するものであり，7に近ければ，肯定的となるように設定されている。

表1. 時間環境構成方略に関する項目

1	集中できる場所で勉強する
2	勉強中は時間を有効に使う
3	勉強のスケジュールを守る
4	勉強するための決まった場所を用意している
5	毎週教科書を読むことや課題を行うことを続ける事ができる
6	定期的に授業に参加する
7	他の活動があっても，勉強に多くの時間を費やす
8	試験前にノートや教科書を開く

対照群は，定期試験1ヶ月前から担当教員によって補習活動を週に2回，1時間程度実施した。介入群は，定期試験の1ヶ月前に以下の内容についてオリエンテーションを実施した。1) 学習方略の説明と時間環境構成方略の獲得が定期試験対策になること，2) 時間環境構成方略に関する入学時の個々のアンケート結果とそれについて改善の必要性があること，3) その対策としてスケジュール作成が有効であることを説明し，了承を得たのちに介入を実施した。

スケジュール作成にあたっては，試験科目の把握，いつまでにノートや資料収集を行うといった目標を担当教員が提示し，記入例とタイムスケジュール表

と（図1），学生自身が目標到達度を確認できるチェックシートを配布した（図2）。1週間に一度，目標の到達度を確認する時間を設定し，チェックシートを記入した後，目標に到達していない学生は，担当教員とスケジュールについて一緒に再度見直しを行った。これは前期定期試験1週間前まで合計4回行われた。なお，補習活動は，成績不良が予測される6名について対照群同様，週に2回1時間実施した。

記入例	午前	午後	19時	20時	21時	22時	23時	24時
7月2日 月	学校で〇ちゃんに心理学のノート、心理臨床のノートを借りる		まさこい		休憩			心理学ノート作り
7月3日 火	空きコマは食堂での器官系の構造と機能のノート作り		まさこい		休憩			心理臨床ノート作り
7月4日 水	運動系の構造と機能のノートを借りる		バイト		休憩			人間発達ノート作り
7月5日 木			まさこい		バイト	バイト	バイト	バイト
7月6日 金	土日でノートを作るように4教科分のノートや資料をコピー		休憩		休憩			英語ノート作り
7月7日 土			要するに空いた時間でノートを作ることが大切。早くノートを作れば、その分、覚える時間ができる					
7月8日 日								
7月9日 月								
7月10日 火								
7月11日 水								
7月12日 木								
7月13日 金								
7月14日 土								
7月15日 日								
7月16日 月								

図1. スケジュール作成の記入例

	科目	ノート	資料	教科書	目標(日付)
1	心理学				
2	器官系の構造と機能				
3	人間の発達				
4	心理臨床				
5	生物学・教育学・医事法・哲学				
6	英会話・ドイツ語・フランス語・中国語				
7	運動系の構造と機能				
8	運動系の構造と機能演習				
9	英語				
10	基礎作業学				
11	情報科学				
12	リハビリテーション概論			レポート	
13	作業療法概論			レポート	
14	健康科学			レポート	

図2. 確認用のチェックシート

前期定期試験1週間前に再度学習方略について調査し，入学時との時間環境構成方略の変化を Wilcoxon 符号付検定にて比較検討した。同時に，「スケジュール作成は大変な作業でしたか」「スケジュール通りに定期試験勉強はできましたか」「スケジュール表に沿って勉強をしようと思いましたか」「スケジュール作成は定期試験勉強の役に立ちましたか」など，9項目について Visual Analog Scale（以下

VAS) を用いて学生の感想を調査した (表 2)。VAS は10cmを100点満点とし、100点に近ければ肯定的となるように設定した。定期試験成績への影響について、年度を超えて担当教員が変わっていない前期試験科目である「心理学」「人間発達学」「英語」「運動系の構造と機能」「運動系の構造と機能演習」について t 検定を用いて比較検討した。いずれの統計手法も危険率 5 %未満を有意水準とした。

表 2. 時間環境構成方略におけるフィードバック項目

1	スケジュール作成は大変な作業でしたか
2	定期試験勉強中、スケジュール表を見ましたか
3	スケジュール表に沿って勉強をしようと思いましたか
4	スケジュール通りに定期試験勉強はできましたか
5	スケジュール表は定期試験勉強の進行について目安となりましたか
6	スケジュール作成は計画的に定期試験の勉強ができましたか
7	スケジュールを作成することによって時間を有効に活用できましたか
8	スケジュール作成することで、多くの時間を定期試験勉強に費やすことができましたか
9	スケジュール作成は定期試験勉強の役に立ちましたか

【結果】

時間環境構成方略 8 項目の平均値は、対照群において開始時 4.5 ± 1.7 、終了時 4.6 ± 1.5 であり、有意な変化を認めなかった。介入群では、開始時 4.3 ± 1.4 、終了時 4.8 ± 1.5 であり、有意な向上を認めた ($p < 0.05$)。

スケジュール作成、その利用に関する感想では、VAS の平均は 55.2 ± 7.4 であった。否定的であった項目は、「スケジュール作成は大変な作業でしたか」 44.3 ± 27.8 、「スケジュール通りに定期試験はできましたか」 43.8 ± 17.1 の 2 項目であり、他は肯定的な結果であった (図 3)。

定期試験結果について、「心理学」は対照群 72.1 ± 19.5 点、介入群 68.1 ± 14.5 点、「人間発達学」は対照群 74.6 ± 14.8 、介入群 80.9 ± 11.3 点 ($p < 0.05$)、「英語」は対照群 54.8 ± 17.8 点、介入群 62.7 ± 15.5 点 ($p < 0.05$)、「運動系の構造と機能」は対照群 52.0 ± 18.9 点、介入群 71.4 ± 14.2 点 ($p < 0.01$)、「運動系の構造と機能演習」は対照群 49.3 ± 20.6 点、介入

群 64.6 ± 18.5 点 ($p < 0.01$) であり、心理学をのぞく 4 科目に有意差を認めた。

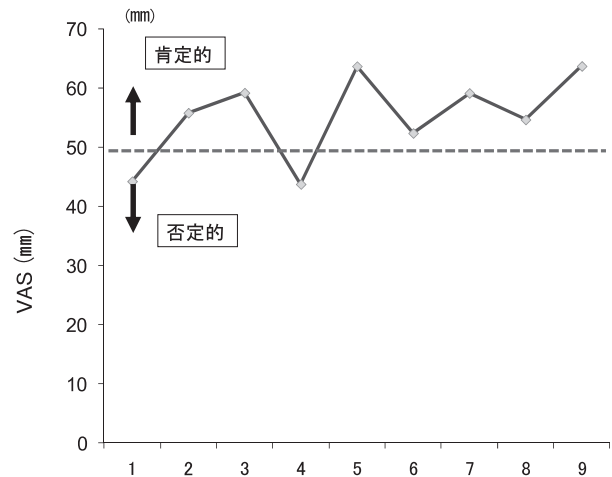


図 3. スケジュール作成後における VAS 結果

【考察】

今回、定期試験対策として学生の時間環境構成方略向上を目的とし、スケジュール作成を実施した。その結果、時間環境構成方略の改善が認められ、定期試験成績も 5 科目中 4 科目で有意に向上した。

介入当初、学生は定期試験合格の目標を掲げていたが、目標を達成する為の具体的な行動計画を立案する事が困難であった。スケジュール作成から 1 週間後の到達度確認時、多くの学生について目標を達成できないスケジュールであったことが明らかとなった。その為、教員は学生と一緒にスケジュールの再立案に加わった。個々の学生の能力に応じた学習時間や学習量、優先的に学習する科目の決定、必要な情報収集などについて助言し、達成可能なスケジュールの立案を援助した。その結果、時間を有効に活用する事や教科書やノートを開くなどの適切な行動が増加していった。定期試験勉強中、スケジュールの立案、目標の達成という学習方略を繰り返し実践する事で、それらの行動が定着していったものと思われた。その結果、時間環境構成方略の改善と定期試験成績の向上が得られたものと推察された。

定期試験終了後の調査では、9 項目中 7 項目において肯定的意見が多かった。否定的であった 2 項目

は、スケジュール作成作業が大変であったこと、予定通りにはいかなかったことについてであった。今回初めての導入であり、これまでになかった作業を追加したことを考えると、至極当然の内容と考えられた。「全体的には定期試験勉強進行の目安となった」、「計画的に勉強できた」「今後も活用したい」などの肯定的な意見が多く、今後スケジュール作成が定着し、作業に慣れることによって否定的な2項目については改善できるものと考えられた。以上のことから、今回の介入は、時間環境構成方略の有効性を学生に実感させるうえである程度機能したものと推察された。

【文 献】

- 1) 伊藤崇達, 神藤貴昭: 自己効力感, 不安, 自己調整学習方略, 学習の持続性に関する因果モデルの検証—認知的側面と動機づけの側面の自己調整学習方略に着目して. 日本教育工学雑誌 27: 377-385, 2003.
- 2) 辰野千壽: 学習方略の心理学—賢い学習者の育て方, pp85, 図書文化社, 1997.
- 3) 有光一樹・篠田かおり: 学習方略における時間環境構成方略が定期試験に与える影響. リハビリテーション教育研究16: 61-62, 2010.